

“Educators for the Next Generation”

学校所在府県：滋賀県

学校名：滋賀県立米原高等学校

名前：堀尾 美央（英語）

実践教科：総合学習

指導時数：8時間

対象学年：高校1年生(普通科英語コース)

対象人数：41人（1クラス）

1. 教師海外研修を通して感じたこと

ゴミ、ガタガタの道路、無法地帯に近い交通事情、排気ガス・・・日本とネパールの間には様々な違いがある。研修が進むにつれ、ゴミ問題にもカーストが絡んでいること、計画は練っているけれど社会問題や地理的問題・言語の問題から実現が難しいこと、カトマンズの私立学校とカトマンズから4時間の山中にある公立学校の違いなど、ネパール国内での格差の大きさと、その教育の難しさ、内在する問題を解決する難しさも感じ、気が遠くなるような感覚に襲われた。しかし、私たちから見ると不便に感じる生活でも、ネパールの人達にとってはそれが日常生活。自然と共存しながら、家族の中で役割を決め、お互いを支えあいながら暮らしていた。そして常に相手を思いやり、人を大切にすることは、カトマンズでも、農村のホームステイでも、山中にあったタマン族の子供たちの学校でも同じだった。大人も子供もみんな笑顔で誰も目の輝いていて、人間味に溢れていた。物はなくても、人がいれば大丈夫だと、何度も温かい気持ちになった。

本研修の柱である、「日本の防災教育が、海外でどのように生かされているか」という点には、研修以前から興味を持っていた。しかし、実際には、国によって環境や事情が違うため、日本の例が、ネパールではそのまま活用できない事例があることもわかった。たとえば、地震が起きると日本では机の下に隠れるが、建物が日本ほど頑丈ではないネパールでは、発生後はすぐ外に出る避難訓練を行っている。だが、文化的背景から「地震は神様が怒った時に起こる」と信じている人も多いため、防災教育に対する意識は高くない。日本では、大地震や災害が起きた時、被害状況や反省を記録に残して次への教訓にするが、ネパールでは、災害の恐ろしい記憶や悲しみから、当時のことを語りたがらない人も多いう。ではどうするのかと、実際に研修でINSECのプロジェクトコーディネーターであるDeepak氏に投げかけたところ、次のように答えてくださった。

「だから、子供たちに防災教育をします。そして、その子たちに、次の世代へ繋いでもらうのです。」

これだ、と思った。いくら技術があっても、人の暮らしを支え、復興へ繋げるのは、結局は人の力だ。JICAの現地事務所を訪れた時に聞いた、「魚を与えるのではなく、魚の釣り方を教える」という言葉の意味と、それが「持続可能な開発」に繋がっていること、そしてそれがネパールの未来に繋がることを感じた瞬間だった。

2. カリキュラム

(1) 実践の目的・背景

「自分達に何ができるか」

この研修への参加が決まった時から、この言葉を中心に置いてネパールに行こうと決めていた。

ネパールで見て、感じて、思ったことを生徒にただ伝えるのはさほど難しくはないが、それを通じて、生徒達に途上国や持続可能な開発への関心を持たせるのは容易ではない。そのため、生徒達に実際に何か行動を起こさせることで、ネパールや諸外国と自分たちに繋がりを持たせ、「自分達にも何かできる」実感を持たせることをねらいとした。

授業の対象者は、本校1年生英語コース生徒41名で、今年度は総合学習の時間で「世界と繋がる授業」をテーマに取り組んでおり、教師海外研修での事後授業を活用して、英語で諸外国に何かを発信することを目標とした。そこで、導入として、まずネパールと日本の違い、ネパール国内での違い、

なぜそのような違いが起きるのかを知り、そしてその後、ネパールと日本の共通点ともいえる、地震をはじめとした自然災害に対する日本の防災教育、特に私たちが小学校の頃から高校生まで、日常や身近に見られる防災について、グループワークでまとめ、英語で諸外国に発信することを目標とした。

(2) 授業の構成

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1 時限目 ネパールについて *ネパールの社会について、そしてその社会が抱える問題を知る。 *日本とネパールの「違い」について考える。 *日本とネパールの「共通点」について考える。	● パワーポイントを用いて授業を進める。 ①ネパールについて (位置、面積、人口、宗教、物価について) ②日本とネパールの「違い」 ③日本とネパールの「共通点」 研修で撮影した写真を見せて、気づいたことを話し合わせる。(空港、信号、走行中のバスやぬかるみを走行するジープから撮影した動画、電線、食事の様子など)	● 写真、動画 (パワーポイント) ● 教材プリント
2 時限目 ネパールでの防災 *ネパールで実施されている「防災教育」について知る。	①ネパールと日本の共通点の1つ「自然災害(特に地震)」について考えさせる 研修で訪れた学校での防災教育の様子、シュリカリカ高等学校での防災訓練、防災教育の様子の動画を見せて、どうしているのかを話し合わせる。 ②最終目標「英語で防災を発信」について説明 ③グループワーク：取り上げる自然災害について「自然災害」と聞いて思い浮かぶものを、マインドマップに書き出してブレインストーミングをする。その後、その中から3つ、各自でピックアップさせて付箋に書き、グループで共有する。最後に、グループで取り上げる自然災害を1つ決める。	● 写真、動画 (パワーポイント) ● ワークシート ● ポストイット (付箋) ● Happy Toppi のポスター
3 時限目 グループワーク① リサーチとブレインストーミング *ネパールと日本の共通の自然災害を含め、防災についての知識をまとめる。	①グループで役割分担 最終的に、ポスター、パンフレット、プレゼンテーションで発表するため、各グループでの担当者決定 ②グループディスカッション 取り上げる災害と、「災害前・災害が怒った時・災害後」の3点について、発表に含める内容を話し合い、必要な情報をインターネットでリサーチする。	● スワルニム学校の防災教育教材(写真) ● シュリカリカ高等学校での防災教育の様子(動画)
4、5、6 時限目 グループワーク② 作業と英訳、発表練習	● パンフレット、ポスター、プレゼンテーション(パワーポイント、紙芝居など)の作成と英訳を進める。 ● 完成したグループから発表の練習をする。	
7・8 時限目 発表・発信 *世界の中での「防災」という観点についての共通理解を進める。 *普段の授業と違い、「英語を使って何かを発信する」実感を持たせる。	● Skype を用いて、準備をしたポスターやパンフレットの紹介と、プレゼンテーションを行う。	

3. 授業の詳細

1 時限目：「ネパールについて」

ねらい…*ネパールの社会について、そしてその社会が抱える問題を考える。

*日本とネパールの「違い」について考える。

*日本とネパールの「共通点」について考える。

◆内容◆

①ネパールについて（位置、面積、人口、宗教、物価について）

②日本とネパールの「違い」

③日本とネパールの「共通点」

研修で撮影した写真を見せて、気づいたことを話し合わせる。
（空港、信号、走行中のバスやぬかるみを走行するジープから撮影した動画、電線、食事の様子など）



カトマンズ市内の信号



カトマンズ市内の通り

生徒の反応

▶点灯していない信号の写真を見せた時は、たくさんの生徒が最初に数秒間沈黙し、しばらくしてから「え？ついてないん？」と驚いていた。その後、なぜ点いていないのか、電線の写真を絡めて説明すると、驚きながらも「なるほど」と納得する生徒が多かった。

◆所感◆ 本授業を展開する普通科英語コース1年生には、普段から異文化に興味を持つ生徒が多い。今回の授業でも、日本では考えられないネパールの様子に多くの生徒が驚いていたが、カルチャーショックを受けながらも楽しんでいる生徒が多かったように思う。また、「ネパール」ときくと「カレー」を思い浮かべる生徒も多かったことから、日本に出稼ぎに来ているネパール人の数や、実際にカトマンズ市内で見た語学学校のことなども話すと、自分たちの予想以上に身の回りにネパールに関係しているものがあることに驚いていた。

2 時限目：「ネパールでの防災」

ねらい…ネパールで実施されている「防災教育」について知る。

◆内容◆

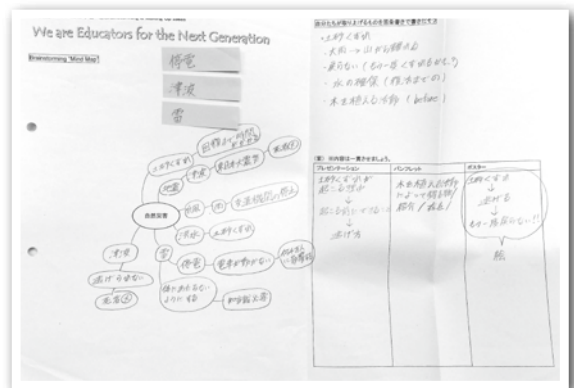
①ネパールと日本の共通点の1つ「自然災害(特に地震)」について考えさせる。

研修で訪れた学校での防災教育の様子、シュリカリカ高等学校での防災訓練、防災教育の様子の動画を見せて、何をしているのかを話し合わせる。

②最終目標「英語で防災を発信」について説明。

③グループワーク：取り上げる自然災害について

「自然災害」と聞いて思い浮かぶものを、マインドマップに書き出してブレインストーミングをする。その後、その中から3つ、各自でピックアップさせて付箋に書き、グループで共有する。最後に、グループで取り上げる自然災害を1つ決める。



生徒のワークシート

生徒の反応

- ▶ 「ネパールと日本に共通しているものは？」と聞くと、ほとんどの生徒が「地震」と答えた。一昨年、ネパールで大規模な地震が発生したことも記憶に残っていたようだった。
- ▶ シュリカリカ高等学校での教室の様子や、生徒の様子に興味津々だった。

◆所感◆ 日本のことを海外に紹介するというと、着物や祭り、寿司などの文化的な側面を思い浮かべることが多い中で、「防災」という観点は生徒にとって意外だった半面、中学生の時に英語の教科書で「避難訓練」という課を勉強したようで、納得した生徒も数名いた。中学校で「避難訓練」という英語を学んでいたというのはこの授業で私も初めて知り、英語の面では少し進めやすくなった。

3 時限目：「グループワーク①リサーチとブレインストーミング」

ねらい…ネパールと日本の共通の自然災害を含め、防災についての知識をまとめる。

◆内容◆

①グループで役割分担

最終的に、ポスター、パンフレット、プレゼンテーションで発表するため、各グループでの担当者決定。

②グループディスカッション

取り上げる災害と、「災害前・災害が怒った時・災害後」の3点について、発表に含める内容を話し合い、必要な情報をインターネットでリサーチする。



パンフレットを作っている様子

4・5・6 時限目：「グループワーク②作業と英訳、発表練習」

◆内容◆

①パンフレット、ポスター、プレゼンテーションの作成と英訳を進める。

②完成したグループから発表の練習をする。

！ココがポイント

プレゼンテーションは、パワーポイントだけでは情報を一方的に提示するだけになってしまいがちなので、紙芝居や寸劇などの案をこちらから紹介し、各グループで好きなものを選んでもらうようにした。結果、紙芝居やハザードマップでの紹介を用意したグループが4グループあった。



ハザードマップの紹介

7・8 時限目：「発表・発信」

ねらい…*世界の中での「防災」という観点についての共通理解を進める。
*普通の授業と違い、「英語を使って何かを発信する」実感を持たせる。

◆内容◆

- ① Skype を使い、海外と接続する。
7 時限目：Amity International School（インド）
8 時限目：DLF Public School（インド）
- ② 海外の先生側に、日本側の生徒を指名してもらい、指名された生徒のグループが発表する。
- ③ 海外側のプレゼンテーションや、防災についての発表を聞く。海外側は英語で話すため、日本側の生徒にわかりやすいように、日本側の教員がわかりやすい英語で言い換えるが、難しい部分は日本語にして伝える。



実際の発表の様子

! ココがポイント

接続する相手国は、教員の方でコンタクトをとって調整したが、ネパールはインターネット環境が不安定な事情もあり、今回はネパールの隣国のインドの学校を相手に実施した。

◆所感◆ 相手の国の先生から指名されるという方法は、英語で発表することに対して適度な緊張感を生徒に与えたようで、始まるまで英語の練習をする生徒の姿があちらこちらから見られた。インドは、2014年にスマトラ沖地震で発生した津波の被害を大きく受けた国の1つであり、また地震も起こる国ということで、防災への意識が高い印象がある。実際、Amity International Schoolの生徒がプレゼンテーションをしてくれたが、地震だけではなく、他の自然災害にも触れていた。たとえば、“landslide(土砂崩れ)”や“flood(洪水)”は、日本側でも取り組んだ生徒がいたため、共通点を見つけることができた。一方で、“volcano eruption(火山噴火)”や“typhoon(台風)”はインド側のプレゼンテーションには含まれておらず、“typhoon”の代わりに“cyclone”という言葉で紹介されていた。ニュースなどで「サイクロン被害」という文言はよく耳にするが、このように交流の中で実際に出てくることで、より身近に感じる事ができたように思う。

生徒の感想

- ▶ インドやネパールでも日本と同じく地震が多いので、あちら側のメリットになる情報を少しでも与えられていたら良いと思います。
- ▶ 相手の発表を聞いていると、津波や台風やサイクロン、あと地震について調べている人が多かった。日本のように、海に面していて、大きい災害にみまわれることが多々あるにしても、日本ほど種類や回数が多いんだなと思った。
- ▶ 発表は一文しか話してないけど、通じたっばかったので良かった。またポスターもみせることができてよかった。
- ▶ 向こうの人達は台風をサイクロンと呼び、津波は私たちと同じようにツナミと呼んでいることを初めて知った。
- ▶ 相手の学生さんたちは、とても意欲的で、私が思いつかなかったようなアイデアを話してくれて驚きました。また、国によって、考え方も違うことに気がきました。

4. 成果

今回の実践では、私たちの身近に見られる防災について英語で諸外国に発信することを目標としたが、授業の導入として、教師海外研修で見てきたネパールの様子を紹介したこと、また、青年海外協力隊の方との交流を話したことで、漠然とではあるが、国際協力や開発協力に興味を持つようになった生徒がいたようだ。もともと、授業の対象クラスである普通科英語コースは、英語や異文化に興味を持つ生徒が多く在籍しているが、主に欧米の文化を中心に興味を持ってきた生徒が圧倒的に多く、ネパールをはじめ、開発途上国について知る生徒は、授業開始当初はほとんどいなかった。それが、この総合学習のなかでネパールの紹介をすることで、ネパールと日本の二国間での開発における違いを知り、ネパールをはじめとした「開発途上国」について知る良いきっかけになったように思う。

また、実際にポスターや紙芝居プレゼンテーションを作るときには、生徒たちは構想にかなり多くの時間を費やしていた。これは、取り組みの中で「日本での例が、必ずしも諸外国の災害事情にあてはまるとは限らない。日本の例を紹介するなら、なぜ日本ではそのような行動をとるのか、必ず理由を示そう。」と伝えたことが起因したようだ。国際協力には欠かせない「相手の立場になって考える」という姿勢を実際に体験し、微々たるものではあるが、その難しさを実感させることができたのではないかと思う。

この授業実践にあたり、一連の内容をプロジェクトと称して、生徒からプロジェクト名を募集した。それが、タイトルにある”Educators for the Next Generation (次世代への教育者)”である。生徒が作成したポスターや紙芝居、パンフレットは、Skype で交流を行ったインドの2校と、ネパールでの研修中に訪問したシュリカリカ高等学校に郵送で送らせてもらった。生徒たちの作った教材が、海の向こうの同年代の子供たちにどう映っているのかはわからないが、この授業での取り組みが、生徒たちが、世界における日本の立場を考えるきっかけになってくれることを願っている。

5. 課題

1 番の反省点は、最終的な「発信」の部分で、ネパールに対して発信しきれなかったところである。シュリカリカ高等学校に教材を送りこそしたものの、実際にもっと（自分が持ち帰った写真や動画を紹介するだけでなく）ネパールと繋がる経験をさせたかったのに、実際にできなかったことが悔いとして残っている。しかし、インドと実施したような Skype 交流はなかなか難しく、他にどのようなことができたのかと問われると答えに詰まってしまうため、自分の視野の狭さやアイデア不足も、今後への大きな課題と捉えている。

次に、時間不足から、ネパールについても防災についても深めきれなかったことを挙げたい。防災については、本来なら、教師海外研修の事前研修で自分たちが受けたように、NPO 法人プラスアーツさんなど外部の方に来ていただいて、自分たちも改めて防災について考えるようなきっかけを作れたかった。しかし、予算や時間の関係で難しく、結局は「とっさのひとこと」の英語版を印刷して配って参考にさせたり、インターネットの情報を参考にしたりしたため、なかなか生徒たちは「自分事」として捉えられなかったのではないかと思う。ネパールについても、国の民族事情や開発状況を伝えることで、もっと防災と密につなげて考えられたかもしれない。

全体として、何かきっかけがあれば、上記の課題を踏まえたいうえで、もう1度取り組んでみたい実践内容となった。

参考資料

・参考文献

『地震イツモノートー阪神・淡路大震災の被災者167人にきいたキモチの防災マニュアル』
渥美公秀 監修（木楽舎）

・参考ホームページ URL

『東日本大震災の教訓を漫画で学ぼう！とっさのひとこと 地震・津波編』
<http://www.plus-arts.net/tossa/>